

## トン子都へいく①

(1) 春です。山からマキを山のようにしょって、女の子がひとり村の方へおりてきました。女の子は小林トシ子。ふとっているのでトン子姉ちゃんといわれています。

(2) 「姉ちゃんたいへんだよ。ウチに今川のやつがきて、またお母さんをいじめているよ」弟の正二がしらせてくれました。「まア、また借金とりね」家の前へ来て

(3) トシ子はマキをおろして「あ、なるほど。ウチの中でドナっているわ」「ねー、いやなやつだね。あいつは鬼だって、いつかお母さんがいつていたよ。お父さんさえ生きていてくれたらねー」

(4) 「じゃア、どうあってもこの五万円はかえしてもらえないんですか」「いえ、その、一・二年まっただければ」「そんなことはできないよ。死んだ主人に五万円かして、今じゃア利息がつもって十万円にもなっているんだ」

(5) 「あのね小父さん、小父さんは死んだウチのお父さんにはトモセワになったっていうじゃアないの。一年や二年まっただろう」「な、なにー。ブタ娘のくせになまいきな。ひっこんでいろー」

(6) 「こいつめー」「あ、なにをするのよあぶないわよ」今川ヤケ吉が打ってかかった手をおさえて「小父さんかえった方がいいよ」

(7) ヒューン バターン。「わーッ」トン子の力はものすごい。今川を外へほうり出してクツをもって来て、

(8) 「はい、かえるのならクツですよ」「タハハハハ、おそろしい力だなア」「小父さん一年や二年まてるでしょう。まてないというのなら」「テへへ、まちますよ。一年まちますよ。さよなら」

(9) 「今川のやつは二年まっというって行ってしまったわ。お母さん、私東京へいって一年みっちりはたらいて十万円ためてかえって来ます。どうか一年間のヒマを下さい」「大丈夫かね、いくらお前がふとっている、十万円はたい金だよ」

(10) 「正二や、お母さんをたのみますよ」「ウン、ボク、しつかりやるよ。姉ちゃん、東京ってとこへいったら、十万円ためて来てね」と、ここにトン子は母のゆるしをえて、

## トン子都へいく①

(11) 父がのこした十万円の借金がえしのために、ふるさとの村をあとにします。「さよならー、元気でねー」いく先は、生き馬の目をぬくといわれる大東京です。さアどんなことがおきるでしょうか。